

## 「成人する前のイエス」

ルカによる福音書 二章四一―五二節

南山教会 二〇二六年一月四日

村山盛芳

次週の礼拝後、牧師館改修に関する臨時役員会が行われます。ご出席ください。ご欠席の場合は、必ず委任状を提出くださいますようお願いいたします。臨時役員会の翌日は、成人の日でお休みです。昔は、一月一日が成人の日でしたが、現在は一月の第二月曜が成人の日で、毎年日にちが変わります。日本の成人式は、市区町村つまり「公」によって祝われ主催されます。日本以外の多くの国で行われている「成人の祝い」は、あくまでも各家庭の私的行事で、家族、親戚が集まって飲み食いし、プレゼントを贈り、子どもの成長を祝い、祝福するという習慣です。キリスト教国ならば、大体一五歳くらいでカテキズム（キリスト教の教え・教理）を学び、礼拝で「堅信礼」（自身の口で信仰を表明する儀式）を受けます。それが済んだ後に、家族親戚が集まり、祝いの会を行います。ですから、「堅信礼」教育が、大人への道備えなのです。

今日の聖書の箇所は、イエスが「一二歳」、まだ少年の時の逸話です。ユダヤでは大体、男の子は「一三歳」で成人式（バル・ミツバ）、女の子は「一二歳」で成人式（バット・ミツバ）を迎えます。「ミツバ」とは「戒律」のことで、律法を自覚的に守ることが出来る年齢に達したことを祝うのが、ユダヤの成人式です。ユダヤ教の儀式としては、一三歳になった男子はシナゴグ（ユダヤ教の会堂）で初めて聖書を朗読します。ユダヤ教では毎週読ま

なければならぬ聖書の箇所が決められています。自分の生まれたその週に読まれた聖書の箇所の正式な読み方をラビ（律法学者）に教わり、暗誦するのです。会衆の前に一人前の信者として初めて登場する晴の舞台、ユダヤ教徒としての数に加えられる日です。

イエスが「一二歳」ということは、バル・ミツバを迎える、つまり大人になる直前のエピソードということになります。四六節でルカは、「イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり、質問したりしておられる」と記していますが、この情景は、子どもが先生から律法の勉強をしている風景です。生徒は地べたに座り、先生は立って律法を唱え聞かせて、生徒に繰り返し復唱させ、暗誦させるのです。今や、大人の階段を一步登ろうとしているのです。

四二節「イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった」。これは興味深い記述です。すでに少年イエスは、自分の頭で考え、自分の足で歩み、自分の判断で行動しているのです。そして親たちはと言えば、それに全く気付いていないのです。子どもは、いつの間にか、もうすでに親が理解できない、分からない道を歩みだしているのです。それを知る時、親は訳が分からず慌てふためきます。行方不明になった息子を捜して、親たちは血眼になり、エルサレムに舞い戻り、ひたすら神殿内を捜す、かわいい子どもが迷子になった一大事だ、としか思っていない。すると当の迷子は、学者たちの教えに熱心に耳を傾け、やり取りしているのです。息子の無事に安堵したのか、つい叱責の言葉がマリアの口から洩れます、「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」。すると少年イエスはこう答え

ます「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということ、知らなかったのですか」。両親にはこの言葉の意味、イエスが答えた言葉の意味が分からなかった、ということです。

子どもが大人になる時、親でさえも、子どもの語ること、ふるまい、そこに込められている真実に全く気づけないし、まったく理解できないのです。「訳が分からない」、子育ての中で、そういう思いをされた方も多いのではないでしょうか。マリアとヨセフでさえも、成長し、大人になろうとしている息子の振る舞いに、当惑し、私たちと同じ思いをしているのです。

「自分の父の家にいるのは当たり前」という少年イエスの言葉は、皆さんはどう理解されるでしょうか。イエスは本来、父なる神のひとり子なのだから、神殿は神の住まいであり、父の家だから当たり前ではないか、と読んでしまうのでは、あまりに表面的すぎる気がします。そもそも「父の家」とは何なのでしょう。人間には、誰しも家、つまり自分の居場所が必要です。子どもの時は、親の家が居場所です。自分を守ってくれ、必要なものを提供してくれ、生命を支えてくれる場所のことです。これがなくては、子どもは成長することができません。でも、いつまでも親の家が、自分の居場所であり続ける訳ではありません。たとえ親と同居していたとしても、親の家だけが、自分の唯一無二の場所とはもはやありません。

人間は、お金や食べ物、衣食住が提供される場だけが、自分の居場所ではありません。ほんとうの居場所は、人から与えられるものではなくて、自分が見出し、自分がそこに歩み、自分がそこで安らぐことができる、自分らしくある場所です。それがどんな所なのか、他

人は推し量ることはできないし、まして親でさえも、知ることや理解できるような場所ではありません。そこに身を置く時に、人間は変わる、イエスもまたそうであったでしょう。五一節「イエスと一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった」。これまではマリアとヨセフ、つまり親の方が、子どもの成長を支え、育み、いろいろ世話を焼いて来ました。しかし今は、両親と共に生活していても、「両親に仕えて」過ごしている、まったく関係が逆転するのです。

今日のテキストは、短い逸話の中に、子どもの成長、子どもが大人になるプロセス見事に表現しています。子どもが大人になる時、親でさえも「訳が分からない」と当惑を覚える、それは取り残されるようで、一方で寂しい思いが沸き起こります。しかしこれについても、ルカはこう記します「母はこれらのことをすべて心に納めていた」。クリスマスの時、羊飼いの言葉を聞いた時と同じ表現が用いられています。「心に納める」とは、理解や分かることがなくても、忘れないで、心に留めておく、という意味です。実はこれは「信仰」のあり方を示す言葉なのです。「信じる」者は、たとえ分からなくても、理解できなくても、放り出すことなく、事柄をありのままに心に温め続けるのです。子どもを信じる、子どもの力を信じるのです。可能性を信じる、ではありません。自分とは別の人格である子どもです。そこに働くのは、その子に生命を与え、イエスをこの世に生まれさせた神のみなのです。その神の御手に私たちは信頼するのです。そこに子どもの成長の根源があることを覚えたいのです。